

林業技術センター  
普及班便り  
(第41回)

## いわての林業人20

はじめに

今月の普及班便りでは、親子二代で原木乾シイタケ栽培に取り組む、洋野町の竹根良浩さんをご紹介します。

参入当初

竹根さんが栽培を始めたのは7年前。それまでは東京の大手電機メーカーでシステム管理者として働いていました。実家ではご両親が栽培しており、その手伝いから始まりました。



竹根良浩さん

やってみて：

「原木が重く、伐採（チェーンソーの目立て、伐倒、切り揃え、搬出）にも苦労した。」と語る竹根さん。最近は一連の作業をこなせるようになりました。前職のシステム管理と比べると、「シイタケ栽培は生産物を手に取り、食べられることが魅力的」とのこと。また、どこで誰が使うかわからない工業製品とは違い、お客さんの顔が見えることも励みになり、日々の作業も「地に足が着いている」と感じるそうです。一方で、「知らないことは自分で調べ、わからない時は自分で考えて進めなければならぬ点は、前職と共通する。」とのこと。とは言いながらも、「近



整備されたホダ場

くに住む高屋敷幸雄さん（岩手県しいたけ産業推進協議会会長）には、「就業当時からずいぶん面倒を見ていただきました。」と、感謝も忘れません。季節、天候、時間を問わずにホダ場で作業する「師匠」の姿に励まされたとのことでした。

目指す栽培

今後の方針をうかがうと、「今は日々、時期々々の作業に追われていますが、両親の年齢などを考えると、今後は植菌本数を減らし、手入れの質を向上させることで収量は維持したい。具体的には作業の効率化、特にハウスを用いた早期植菌、早期ホダ化を進めたい。そのためにはハウス内温度の適切な管理が不可欠なの



太い木も無駄なく利用

で、温度を上げ過ぎず、また温度を下げる方法を考えたい。」と意欲的です。さらに、「天気、乾燥のスケジュールなど、予想や判断の難しい要素は多いが、常に最悪の事態を考えながら、リスク管理を心掛けたい。」と、前職の「工場ラインが停まれば数億円の損失」というプレッシャーに鍛えられた感覚が、シイタケ生産にも活かされているようでした。

おわりに

ホダ場での様子から、日々の工夫や努力を怠らない熱意が伝わってきました。全国品評会での上位入賞と、今後の活躍が楽しみです。

林業技術センター普及班



地域の生産者に説明  
(ほだ作りコンクール)